私のモチーフ
その移り変わり

会員　大岩　充子

「何とかして絵を続けよう。」

それだけを考えていた。好きなように時間を使えた学生時代とは違い、仕事と家事、育児に追われる日々。自然にモチーフは身近なものになった。子どもが寝ている様子、室内で遊んでいる情景、窓辺やベランダを背景とし、飼っているインコも絵に登場した。日常の何げない一コマをモチーフにした。1年に1作程度の遅いペースであった。（作品A）

子ども達の成長とともに少しずつ行動範囲は広がっていき、絵のモチーフは変化した。水族館の魚の群れを見ている子ども達、アシカのショーの様子、博物館の化石等、とりとめもなく描いた。

転機となったのは、ファミリー牧場での羊の毛刈りショー。そこでもらった一かたまりの毛玉から、羊毛を使ってのフェルト作りや糸紡ぎ等をする機会ができた。そんな事をしているうちに、自然の中の羊たちに会いに行きたくなった。そして、夏休みにモンゴルに行った。

見る景色、文化、すべて日常と違い新鮮だった。その時の作品が『草原への道』（作品B）モデルは自分。民族衣装を着て描いた自画像である。似せては描いていないが…

その後、取材地はチベット、ベトナムに移っていった。道ばたや市場でものを売っている人々に心惹かれた。それらの人々が売っている物は古い器や仏具、怪しげな宝飾品類、南国の見たこともない果実や花等であった。この頃のモデルは母である。それらの国らしい服装でじっと座ってくれたことに今でも感謝してい

▲　A「朝の窓辺」

◀　B「草原への道」

◀　C「路傍の商い」

る。（作品C・D）

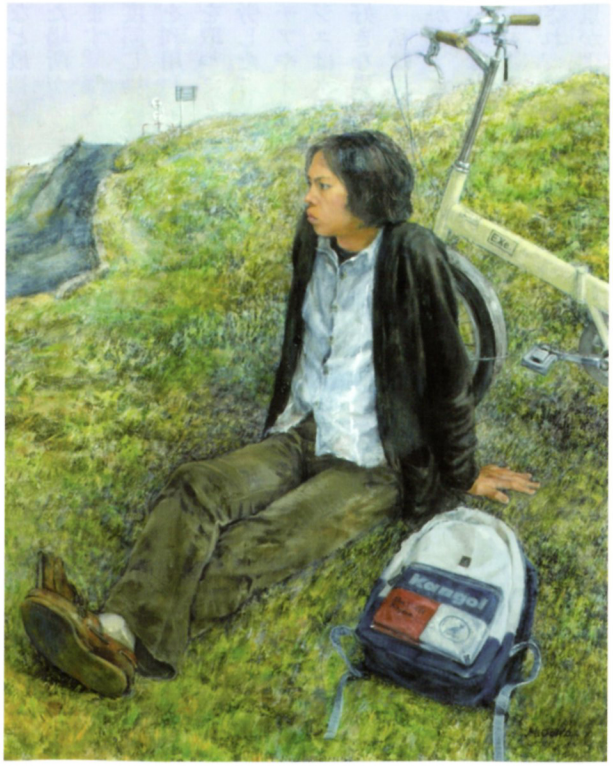
そして定年を待たずに退職。

「やった。ついに自由に描ける時間ができた!!」と喜んだ。早速近くの大学にモデルのアルバイト募集の申し込みに行ったが、「男とか女とか指定してはいけない。」とのこと。案の定、男の子が応募してきた。大変困ったが描くしかない。その子の感じに合わせて、自転車や土手の景色を描き入れたり、楽器等を入れたりした。（作品E）

その後、定期的に来ていただける女の方が見つかり、糸を紡いだり、織ったりしている様子を描くようになった。紡ぎ車や小さな織り機を使い、アトリエの一隅が背景となった。（作品F）また、各地の工房を訪ねることで、伝統を受け継ごうとしている若い方々がいることも印象に残った。

今日まで、あまり深く考えず、その時々に惹かれた物を描いてきただけだったが、以前には考えられなかった静かな自分の時間を持てることを有難く思っている。いつ崩れ去ってしまうかわからないこの平和な日常が長く続くことを願って描いている。

▲　D「ハノイ裏通りにて」



▲　E「帰路」

▲　F「午後のマイタイム」